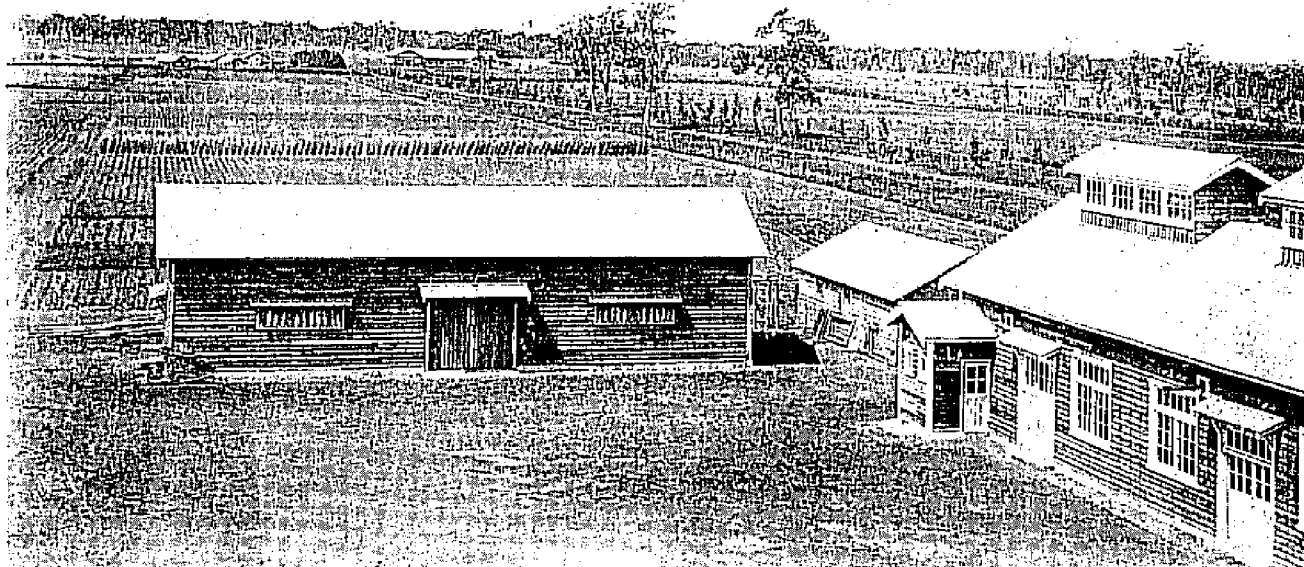


中標津町郷土館だより

発行 平成7年11月1日
発行所 中標津町教育委員会
標津郡中標津町丸山
2丁目22番地
電話 01537-3-3111

第8号



－ 60年前の白樺並木 －

この写真は、昭和10年頃に北海道立根釧農業試験場の屋上から西方向に向けて写したものです（中標津町高校方向）。現在では中標津の代表的な白樺並木になっていますが、当時は2mにも満たないものでした。

写真中央の左側にある大きな建物は（白樺並木をつきあたって右側）、移転前の中標津小学校です。

カエルのついた土器

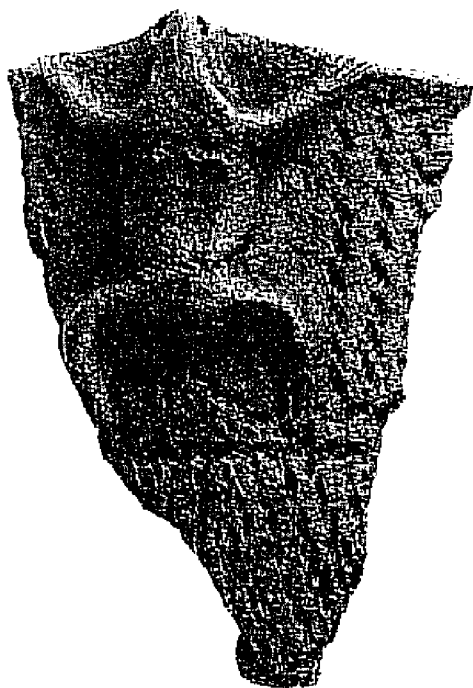
この土器については「郷土館だより」の第2号でも紹介していますが、昨年度に釧路市の幣舞遺跡からもカエルのモチーフのある土器が発見されましたので、新たに比較してみましょう。

まず、これらの土器が造られた時代ですが、およそ2000年程前の「縄縄文」といわれる時代の始め頃です。あまり聞きなれない時代ですが、これは本州の弥生時代と同じ頃に北海道にあった時代です。

北海道内において発見されている動物などのつけられている遺物（土器、石器、骨角器）は、これらの他にもありますが、この縄縄文時代において両生類（カエル）のついている土器は、今のところこれらの3点だけです。

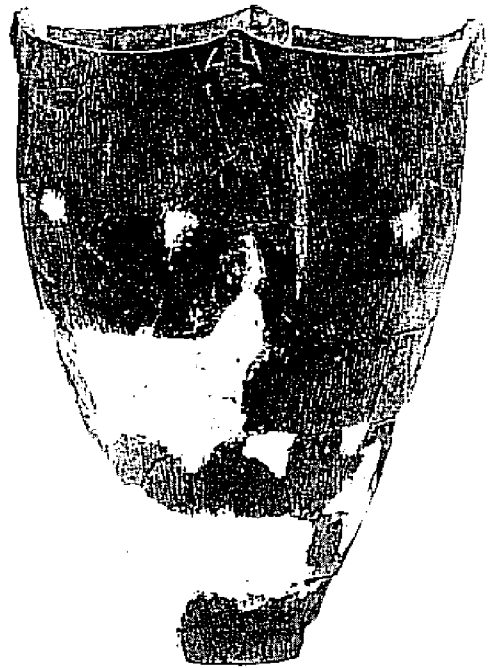
では写真を見ていきましょう。

【釧路市】



(□ 釧路市出土の土器)

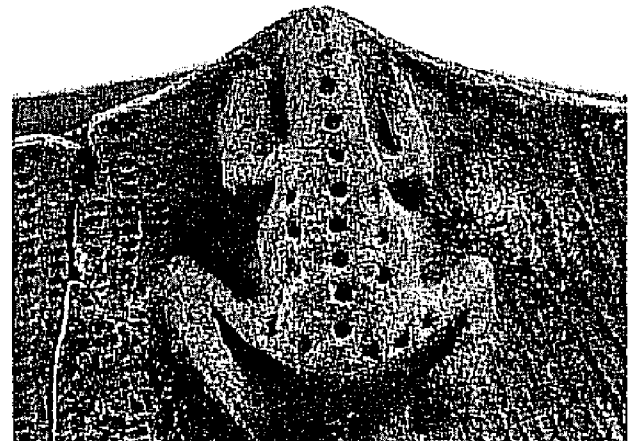
【中標津町】



(② 中標津町出土の土器)



(③ 中標津町出土の土器-1)

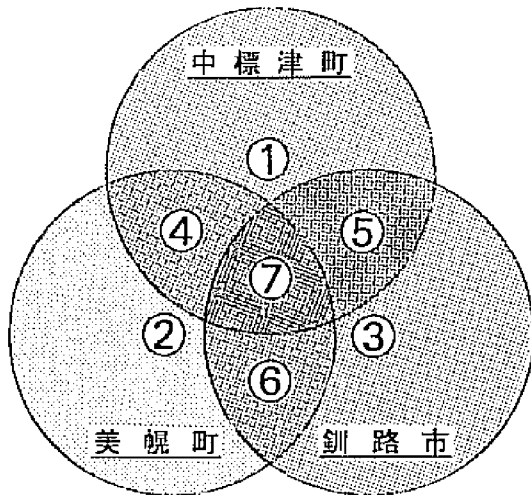


(④ 中標津町出土の土器-2)

【美幌町】



(図 美幌町出土の土器)



次の上の図のように分けてみてみますと、

①中標津町だけの特徴

- ・後ろ足が大きく曲げられている。
- ・目、口、指先が表現がない。
- ・カエルのすぐ近くまで縄文がつけられている。

②美幌町だけの特徴

- ・後ろ足が上を向いている。

③釧路市だけの特徴

- ・目がある。
- ・お尻の穴(?)がある。
- ・体の模様には縄文を使っている。
- ・カエルの近くの模様には縄線文(縄を押しつける)を使っている。

④中標津町と美幌町の似ている点

- ・カエルの模様のつけ方(特に中標津町の③と美幌町はそっくり)。
- ・目がない。
- ・頭が細長い。
- ・腕が大きく曲がっている。
- ・全体の形が似ている。

⑤中標津町と釧路市の似ている点

- ・手が上、足が下を向いている。

⑥釧路市と美幌町の似ている点

- ・指先の表現がある。
- ・口がある(写真からはわかりません)。

⑦全てに共通している点

- ・続縄文時代初頭の時期。
- ・土器上部の山形突起(波状口縁と言います)の頂点に付いている。

しかし、なぜカエルなの?と聞かれると、「ウーンはっきりしたことはまだわからない!」と答えるほかはないのです。もしかするとカエルの多産性に豊穡の願いをこめたのかも知れません。

※なお美幌町ではカエルではなく、サンショウウオとして展示しています。

！根室・釧路の昔話！

「西別岳の死神」

摩周岳の隣にあるなだらかな姿をした西別岳は、死人の行くポクナシリ（地獄）と呼ばれ恐れられていた。そのためこの山に近づく者はいなかったという。

ある日のこと、虹別のトスムシという人がこの近くを歩いていると、向こうから外套を来たアイヌが来たので、変な人だなと思って近づいてみると、そのアイヌは「お前は私とポクナシリへ行くんだ」と言うので、トスムシは驚いて「私はまだそんなところへ行くのはいやだ」と断ったが、「私は死人だが、どうしてもお前を連れていく理由があるから黙って私についてこい」とそのアイヌが言ったとたん、トスムシは何だか夢のような気持ちになったので、眼を閉じて言われるまま後をついて行った。するとあたりは真昼なのに、まるで闇夜を歩いているような淋しさであった。山奥深く入ったと思う頃、死人はいきなりトスムシを縛り木の枝につるし上げ、こつぜんと姿を消してしまった。トスムシは何とかして縄から



【西別岳（左）とカムイヌプリ（右）】

逃れようともがいたが、縄は解けずそのうち日が暮れてしまった。

夜が明けるとトスムシがいないため、部落は大騒ぎになった。そして大勢で西別岳に行くと、枝につるされたトスムシを発見した。トスムシは縄を解かれ助けだされたが、それからこの山は一層恐れられるようになったという。

（膝知文「東夷周覧」）

【1971年、『アイヌ伝説集』

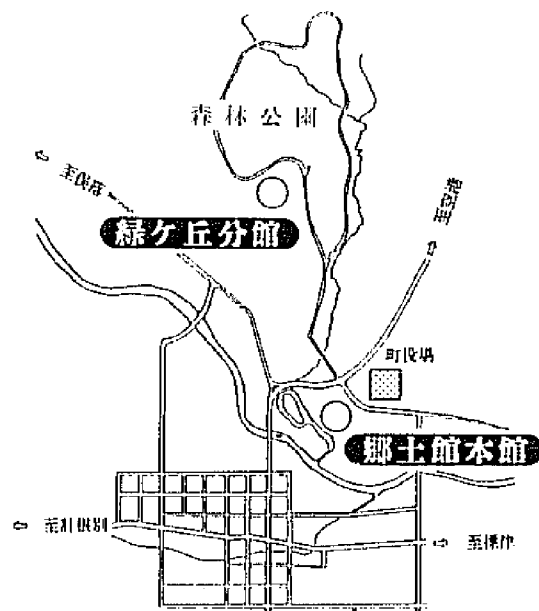
更科源藏編著、北書房版より要約】

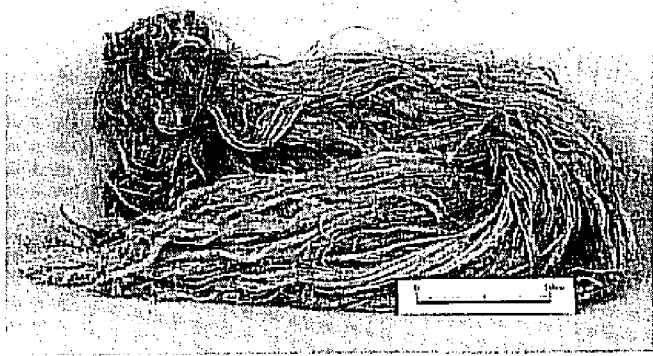
――編集後記――

今年は夏から秋にかけて、子供達を対象にしたキャンプ、近年減少化が進む町の花であるエゾリンドウの調査、名木の調査、札幌で開催された生涯学習フェスティバルなどがありました。ふと気がつけばもう冬の気配が、．．．呆然！

原稿をお寄せいただいた皆様に厚くお礼申し上げます。（山宮記）

中標津町郷土館及び分館案内図



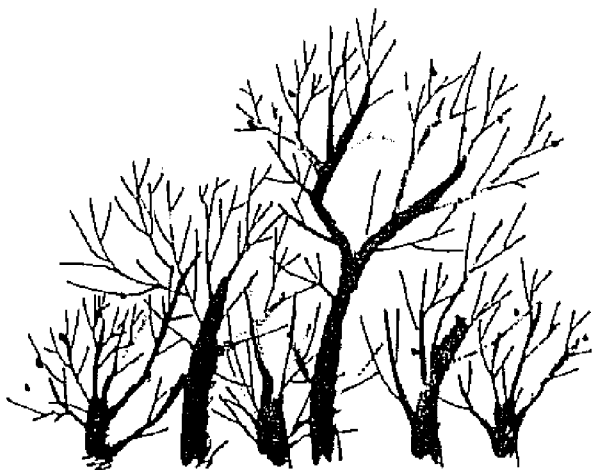


【郷土館に収蔵されている亜麻繊維】の歯でバイオリンを弾くように押し引きして、羽根車に回転を与え、種子を半円形に放擲する撒播器である。この他に弦式と称する、弓と歯車の代わりにひもで回転する形態もある。

バイオリン式の能率は手撒きのおよそ10倍で1時間当り最大1.5町歩の播種が可能であった。

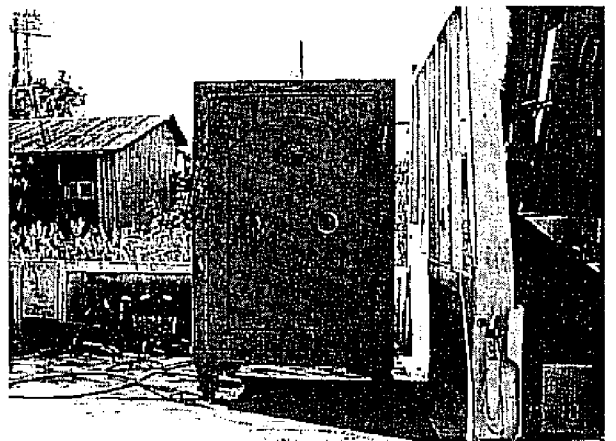
現在は亜麻の栽培はなくなったが、牧草の播種器として活用している酪農家もいる。(1982年、紺谷憲夫「北海道における亜麻作の展開」『北の技術分化第4号』より抜粋)

(中標津町史料室 中會根茂四郎)



新着資料紹介

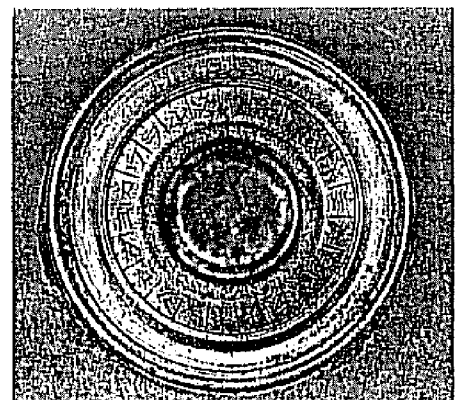
●金庫 (寄贈者：鈴木政治郎氏)



縦64.5cm、横59.2cm、高さ100cmの大きな金庫です。正面上部のプレートには、「改良特別鋼鉄製第六号」、中央のプレートには「大日本東京風間商店製造、ASA KUSABASITÖL.TOKYO.JAPAN」とあります。

もともと中標津にあった帝国製麻株式会社(昭和13~37年まで操業)で使用されていたものが、その後中標津木材加工共同組合、そして北海道ステック工業株式会社へと譲り継がれていきました(北海道ステック工業では昭和47~57年まで使っていたそうです)。

金属のカタマリと言ってもいいくらいのこの金庫はととても重たく頑丈ですが、ひとつ面白いのは、ダイヤル式の鍵が「イロハニ...」となっているところです(下の写真)。



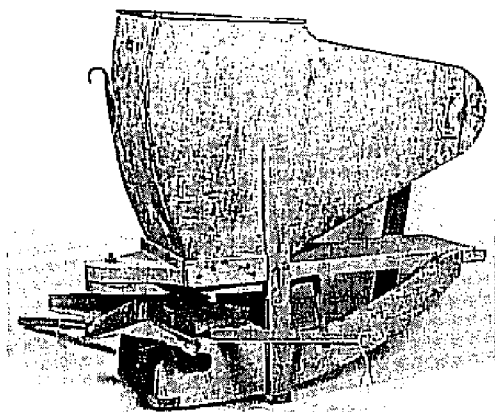
資料説明

バイオリン式^{しき}亜麻^{あま}播種器^{はしゅき}

現在、亜麻は過去の作物として一般からはほとんど忘れられています。第二次世界大戦中は水が漏れないということで、兵器にかぶせる袋や水のう、ホースなどに利用されました。そのため軍需作物として強制的に作付けを強いられていて、その工場も陸海軍の共同管理工場に指定されていました。

戦後は繊維物資がとて少なかったため冷害にも強く育成期間の短い（80～90日で収穫できる）亜麻は繊維作物としてさかんに栽培されました。しかし、その後化学繊維の登場によって、天然素材は年々衰退していくようになり、ついに中標津にあった亜麻工場も昭和37年に閉鎖されました。その後、わずかな希望者によって栽培された亜麻は標茶の工場に運ばれましたが、昭和39年にはその姿を見ることはできなくなりました。

亜麻の種は散らし播きをするため、手播きで平等にまくのは非常に難しく、上



【郷土館に収蔵されている亜麻播種器】

手に播くにはかなりの練習が必要でしたが、そこで現れたのがバイオリン式亜麻播種器でした。これについてくわしく書いているものがあるので、ここに抜粋してみます。



【亜麻播種器による作業】

「バイオリン式亜麻播種器」

この型の播種器は初め、明治40年に帝国製麻の鈴木鈴馬が欧州視察に際して、オランダから持ち帰ったものを会社が模造し、亜麻工場へ配付したという。

しかし、本格的な使用は第一次大戦以後の技術改良にとりかかるようになってからである。—中略—

本器は十勝の大樹町で昭和17年頃使用された弓式（別に歯車式ともよぶ）播種器である。ブリキの種函の下部に雪の結晶のごとき羽根車をつけ、軸の歯車を弓